

『太平經經鈔』庚部卷之七(涵七四七、葉一表第一行、葉二表第三行)

【原文】

虚無自然圖道必成誠

虚無者、乃内實外虚、有若無也。反其胞胎、與道居也。獨存其心、懸龍慮也。遂爲神室、聚道虚也。但與氣游、故虚無也。在氣與神、其餘悉除也。以心爲主、故得無邪也。詳論其意、無忘真書也。得之則度、世可久游也。何不趣精、反與愚俱也。凶禍一至、被大灾也。棄其真朴、反成土灰也。賢者見書誠之。

【校勘】

『太平經合校』卷一百三庚部之一

虚無自然圖道必成誠…太平經作「虚无無爲自然圖道畢成誠」。

虚無者、乃内實外虚…太平經作「虚无者、乃内實外虚也」。

懸龍慮也…太平經作「懸龍慮也」。

無忘真書也…太平經作「毋忘真書也」。

得之則度、世可久游也…太平經作「得之則度、可久游也」。

【訓】

虚無自然と道を圖りて必ず誠を成す

虚無は、乃ち内實にして外虚、有にして無の若きなり。其の胞胎に反り、道と居するなり。獨り其の心を存するのみにして、龍慮に懸くるなり。遂に神室と爲り、道虚を聚むるなり。但だ氣と遊ぶのみにして、故に虚無なり。氣と神とに在り、其餘悉く除するなり。心を以て主と爲し、故に邪無きを得るなり。詳しく其の意を論じて、真書を忘ること無かれ。之を得れば則ち度し、世より久しく遊ぶ可きなり。何ぞ精に趣かず、反て愚と俱にあらんや。凶禍一たび至らば、大灾を被むるなり。其の真朴を棄つれば、反て土灰と成るなり。賢者書を見て之を誠む。

【訳】

虚無と自然は道を目指し、(人々に)必ず戒めをもたらすということ

虚無とは内側が実でありつつ外側は虚であり、有にして無のようである。それは、かの母胎に回歸して道と共にある。これはただかの心を存することにあるのであり、老君の神慮に

かかっている。それはやがて神室となり、道と共にある虚を結集する。それらはただ氣と戯れるばかりで、それゆえに虚無なのである。それは氣と神に在り、そのほかは全く何もない。心を主とするゆえに、邪がないことが可能なのだ。詳細にその主旨を考究し、真なる書を忘れてはならない。これを手にすれば道へ至り、幾世にもわたりとこしえに（天地の間を）逍遙することができよう。どうしてこうした精妙なあり方に向かうことなく、逆に愚者と共にあろうとするのか。災いが一たび至るならば、それは大きな被害を受けることとなろう。かの純真な無垢の状態を打ち捨てれば、かえって土くれと成ってしまうことだろう。（そこで）賢者は書を見てこれを戒めとするのだ。

【注】

○胞胎

葛洪『抱朴子』釋滯「得胎息者、能不以鼻口嘘吸、如在胞胎之中、則道成矣。」
『太平經鈔』乙部卷二「胞胎及未成人而死者、謂之無辜承負先人之過。」

○龍慮

『史記』老子韓非列傳「孔子去、謂弟子曰、……至於龍吾不能知、其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。」

○神室

彭曉『周易參同契分章通真義』卷中・類如雞子章第六十四「凡修金液還丹有壇、壇上有爐、爐上有電、電中有鼎、鼎中有神室、神室中有金水也。神室象雞子、金水亦如之。」

○氣、神

『太平經合校』四行本末訣第五十八「凡事人神者、皆受之於天氣、天氣者受之於元氣。神者乘氣而行、故人有氣則有神、有神則有氣、神去則氣絕、氣亡則神去。故無神亦死、無氣亦死。」

○真朴

『老子』第二十八章「知其榮、守其辱、為天下谷。為天下谷、常德乃足、復歸於樸。樸散則為器、聖人用之、則為官長、故大制不割。」

【原文】

無為者、無不為也。乃與道連、出嬰兒前、入無間、到於太初、乃返還也。天地初起、陰陽源也。入無為之術、身可完也。去本來末、道之患也。離其太初、難得完也。去生已遠、就死門也。好為俗學、傷魂神也。守二忘一、失其相也。可不戒之、道之元也。子專守一、仁賢源

也。天道行一、故完全也。地道行二、與鬼爲鄰也。審知無爲、與其道最神也。詳思其事、真人先也。閉子之金關、無令出門也。寂無聲、長精神。神氣已畢仙道門、易哉大道不復煩。天道無親、歸仁賢也。

【校勘】

入無間…太平經作「入無間也」。
乃返還也…太平經作「及反還也」。
好爲俗學…太平經作「好爲俗事」。
可不戒之…太平經作「可不誠哉」。
與鬼爲鄰也…太平經作「與鬼神鄰也」。
無令出門也…太平經作「毋令出門也」。
長精神…太平經作「長精神也」。
神氣已畢仙道門…太平經作「神氣已畢、仙道之門也」。
易哉大道不復煩…太平經作「易哉大道、不復煩也」。
天道無親…太平經作「天道無有親」。
一根萬枝、不無有神…太平經作「一根萬枝無有神」。
俱相混沌出妙門…太平經作「俱相混沌出妙門」。從經。

【訓】

無爲は、爲さざる無きなり。乃ち道と連なり、嬰兒の前に出でて、無間に入りて、太初に到り、乃ち返還するなり。天地初めて起きるは、陰陽の源なり。無爲の術に入れば、身完かる可きなり。本を去りて末に來るは、道の患なり。其の太初を離るれば、完きを得ること難きなり。生を去ること已に遠ければ、死門に就くなり。好みて俗學を爲せば、魂神を傷るなり。二を守りて一を忘るれば、其の相を失ふなり。之を戒まざるべけんや、道の元なり。子専ら一を守るは、仁賢の源なり。天道一を行ふ、故に完全なり。地道二を行ふ、鬼と鄰りと爲るなり。審らに無爲を知らば、其の道と最も神なり。詳らかに其の事を思はば、真人の先ならん。子の金關を閉じ、門より出で令むること無かれ。寂として無聲にして、精神を長ず。神氣已に畢れば仙道の門、易しきかな大道復た煩ならず。天道親無くして仁賢に歸するなり。

自然の法、乃ち道と連なり、之を守らば則ち吉、之を失はば患有り。比するに萬物生じて自ら完し、一根に萬枝あるが若く、神有る無からず。詳らかに其の意を思へば道自ら陳ぶ。俱に混沌を祖として妙門を出で、無増無減にして……

【訳】

無爲は、全てを成し遂げる。これは道とつながっており、嬰兒（のような完全な状態）以前の姿を取ったり、隙間のないところに入ったりして、太初に到達する。これが（道に）

帰るということである。天地の始まりは、陰陽の源である。無為の術に到達すれば、その身を長らえることができる。本源から離れて末節に向かうのは、道から見れば憂患である。かの太初を離れてしまうと、その身を長らえることは難しい。生からはるかに遠ざかってしまうと、死の門にたどり着く。世俗の学を好んで学べば、靈魂を損なうことになる。二を守って一を忘れれば、その（かりそめの）相（である肉身）を失うだろう。（だから、）これを戒めないわけにゆこうか、それは道の大本であれば。あなたが一を守るのに専念するのは、仁と賢明さの源である。天道は一を行うがために、完全なのだ。地道は二を行い、幽鬼と共にある。詳細に無為を理解したら、かの道と共にあって最も神妙な存在となろう。細かくそのことを考えてみるならば、真人に先立つ者となろう。あなたの重要な関所（である感覚器官）を閉じ、（精と神を）その門（である感覚器官）より漏らしてはならない。寂然として音も立てずに、精と神を養うのだ。神気を漏らさないことが成し遂げられればそれが仙道の門である。何と容易であろうか、大道はまた煩瑣なものではない。天道は誰かを不当に寵愛することなく、仁者と賢者のもとに訪れるのである。

【注】

○無爲者、無不爲也。

『老子』第三十七章「道常無為而無不為。」第四十八章「為學日益、為道日損。損之又損、以至於無為。無為而無不為。」

○嬰兒

『老子』第十章「載營魄抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。」第二十章「我獨怕兮其未兆。如嬰兒之未孩。儻儻兮若無所歸。衆人皆有餘、而我獨若遺。」第二十八章「知其雄、守其雌、為天下谿。為天下谿、常德不離、復歸於嬰兒。」

『太平經鈔』には六例あり。

『太平經鈔』丁部卷四「故反嬰兒則無凶、老還反少與道通。」

『太平經鈔』戊部卷五「先以安形、始為之、如嬰兒之遊、不用筋力、但用善意。詳念先人獨壽、其治獨意、以何得之。但以至道、繩邪去姦、此若神矣。」

○無間

『老子』第四十三章「天下之至柔、馳騁天下之至堅。無有入無間、吾是知無為之有益。」

『太平經鈔』丙部卷三「故上士修道、先當食炁、是欲與元炁和合、當茅室齋戒、不睹邪惡、日鍊其形、無奪其欲、能出入無間、上助仙真元炁天治也。是為神士、為天之吏也。」

『太平經鈔』庚部卷七「道者、乃皇天之所取法也。最善之稱、冠無上、包無裏、出無間、入無孔、天下凡事之師也。」

○太初

『列子』天瑞「子列子曰、昔者聖人因陰陽以統天地。夫有形者生於无形、則天地安從生。故曰、有太易、有太初、有太始、有太素。太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣形質具而未相離、故曰渾淪。」

『太平經鈔』丁部卷四「上古之時、有智慮無所不照、無所不見、受神明之道、昭然可知、亦自有法度、不失其常。從太初已來、歷有長短、甚深要妙。」

○俗學 『太平經』は「俗事」に作る。

『莊子』繕性「繕性於俗、俗學以求復其初、滑欲於俗、思以求致其明、謂之蔽蒙之民。」

続古逸叢書本・道藏本『注疏』による。ただし、王先謙本等は、「俗學」の「俗」を衍字とする。

『太平經鈔』戊部卷五「不樂久存者、宜就俗事、但樂止其身而已。」

『太平經鈔』己部卷六「或久乃能入室而度世、不復譽於俗事。」

○魂神

『後漢書』列女傳・董祀妻「登高遠眺望、魂神忽飛逝。」

『太平經鈔』戊部卷五「形若死灰守魂神、魂神不去乃長存。」

○守二忘一

『太平經鈔』乙部卷二「守一者、天神助之。守二者、地神助之。守三者、人鬼助之。四五者、物祐助之。故守一者延命、二者與凶為期、三者為亂治、守四五者禍日來。」

『太平經鈔』癸部卷十「謂入神之路也、守三不如守二、守二不如守一。深思此言、得道探奧矣。」

○相

『太平經鈔』癸部卷十「道之生人、本皆精氣也、皆有神也。假相名為人。」

○守一

『太平經鈔』乙部卷二「夫一者、乃道之根也、氣之始也、命之所擊屬、眾心之主也。當欲知其實、在中央為根、命之府也。故當深知之、歸仁歸賢使之行。人之根處內、枝葉在外、令守一、皆使還其外、急使治其內、追其遠、治其近。」

『太平經鈔』壬部卷九「問曰、『古今要道、皆言守一可長存而不老。』『人知守一、名為無極之道。人有一身、與精神常合并也。形者乃主死、精神者乃主生、常合即吉、去則凶。無精神則死、有精神則生、常合即為一、可以長存也、常患精神離散、不聚於身中、反令使隨人念而遊行也。故聖人教其守一、言當守一身也。念而不休、精神自來、莫不相應、百病自除、此即長生久視之符也。』」

『太平經』卷三十七・五事解承負法第四十八「以何為初、以思守一、何也。一者、數之始也。一者、生之道也。一者、元氣所起也。一者、天之綱紀也。故使守思一、從上更下也。夫萬物凡事過於大、末不反本者、殊迷不解、故更反本也。」

○為鄰 『太平經』は「為」字なし。

『太平經鈔』乙部卷二「能通神明、有以道為鄰。」「神人曰、決之於明師、行之於身、身變形易、與神道同門、與真為鄰、與神人同戶。」

○真人 『太平經』には神人↓真人↓仙人↓道人の序列あり。

『太平經鈔』乙部卷二「前古神人治之、以真人為臣、以治其民……。其次真人為治、以仙人為臣、……。其次仙人為治、以道人為臣、……。其次霸治、不詳擇其臣、……。」

○金闕 『太平經』は「金闕」に作る。

『黃庭內景玉經註』卷上 經「重扉金闕密樞機」梁丘子註「金取堅剛也。老子〔27〕云、善閉者無闕捷而不可開。言養生者、善守精神、不妄洩也。」

『淮南子』本經訓「精泄於目、則其視明。在於耳、則其聽聰。留於口、則其言當。集於心、則其慮通。故閉四關則身無患、百節莫苑、莫死莫生、莫虛莫盈、是謂真人。」主術訓「夫目妄視則淫、耳妄聽則惑、口妄言則亂。夫三關者、不可不慎守也。」

○神氣

『太平經鈔』癸部卷十「愚人不知還全其神氣、故失道也。能還反其神氣、即終天年、或增倍者、皆高才。」

○天道無親

『老子』第七十九章「天道無親、常與善人。」

【原文】

自然之法、乃與道連、守之則吉、失之有患。比若萬物生自完、一根萬枝、不無有神。詳思其意道自陳。俱相混沌出妙門、無增無減守自然。凡萬物生自有神、千八百息人為尊、故可不死而長仙、所以早終失自然、禽獸尚度況人焉。愚者賤道、下與地連、仁賢貴道、忽上天門、神道不死、鬼神終焉。子欲為之、如環無端、慎無入有、自益身患、亦無妄去、令人死焉。天地之性、獨貴自然、各順其事、無敢逆焉。道興無為、虛無自然、高士樂之、下士忽焉。詳學知師、亦無忌言、有師明道、無師難傳。學不師訣、君子不言、妄作則亂文、身自凶焉。道已畢備、便成自然。

【校勘】

一根萬枝、不無有神…太平經作「一根萬枝無有神」。

俱相混沌出妙門…太平經作「俱祖混沌出妙門」。從經。

所以早終失自然…太平經作「所以蚤終失自然」。

愚者賤道…太平經作「愚者賤道志」。

鬼神終焉…太平經作「鬼道終焉」。

慎無入有…太平經作「慎毋有奇」。

亦無妄去…太平經作「亦毋妄去」。

無敢逆焉…太平經作「毋敢逆焉」。

下士忽焉…太平經作「下士恚焉」。

詳學知師…太平經作「詳學於師」。從經。

亦無忌言…太平經作「亦毋妄言」。

有師明道…太平經作「有師道明」。

【訓】

自然の法、乃ち道と連なり、之を守らば則ち吉、之を失はば患有り。比するに萬物生じて自ら完し、一根に萬枝、神有る無からざるが若し。詳らかに其の意を思へば道自ら陳ぶ。俱に混沌を祖として妙門を出で、無増無減にして自然を守る。凡そ萬物生じて自ら神有り、千八百息すれば、人尊しと爲す。故に不死にして長仙たる可し、早く終るは自然を失ふ所以なり。禽獸すら尚ほ度す、況んや人をや。愚者道を賤しみ、下りて地と連なり、仁賢道を貴び、忽ち天門に上る、神道は死せず、鬼道は終焉す。子之を爲さんと欲すれば、環の如く端無く、慎みて有に入ること無かれ、自ら身患を益さん。亦た妄去すること無かれ、人をして死せ令めん。天地の性、獨り自然を貴ぶのみ、各おの其の事に順ひ、敢て焉に逆らふこと無し。道は無爲を興し、虚無自然にして、高士之を樂しみ、下士焉を忽かにす。詳らかに師に學べは、亦た忌言無からん。師有らば道を明らかにし、師無くんば傳ふること難し。學びて師訣ならず、君子は言はず、妄りに作れば則ち文を亂し、身自ら凶ならん。道已に畢く備はれば、便ち自然を成さん。

【訳】

自然の法は道とつながっており、これに従えば幸運が訪れ、これから離れば災いが起きる。それはあたかも、あらゆるものが生まれてそれ自身で完結し欠けたところがなく、また、一本の根に無数の枝が生えるのも、神妙なるはたらきによるのにほかならないようなものである。詳細にその道理を考究してみれば、道はおのずと明らかになることだろう。それは混沌を大本とし、靈妙なる門から現れ、増えることも減ることもなく自然のあり方を堅持している。およそ万物が生まれれば（そこには）自ら神が備わる、（中でも）千八百回もの息をする人は最も尊い存在である（？）。それゆえ、死ぬことなく、とこしえに生きる仙人に

なることができるのであり、だから、早逝する者は自然のあり方を失っているのである。鳥や獣ですら救済されるのであるから、ましてや人については言うまでもない。愚者は道を卑しめ、（死後）下降して地下へと向かうが、仁者や賢者は道を貴び、すぐさま天門を上っていく。（こうした）測り知れぬあり方は滅びることなく、鬼神たちは死を迎える。あなたがそのようになりたいと願うならば、輪のように端がないような状態（すなわち、感覚器官から精や神が漏れないような完全な状態）を成し遂げ、ゆめゆめ有限のあり方に没入することのないように。それは、我が身の災厄を増やすことになる。また、みだりに道のあり方から離れてはならない。それは、人に死をもたらずであらう。天地の性はただ自然を貴ぶだけで、それぞれ自分のすべきことに従事して、それに逆らおうとはしない。道は無為をなし、虚無にして自然であり、優れた士はそれを楽しみ、下らぬ士はそれを軽視する。詳しく（こうした道について）師から学べば、包み隠さず教えてくれよう。（このように）師がいれば道を明らかにできようが、師がいなければ道を伝えることは難しい。学んだとしてもそれが師の口訣によるものでなく、（そもそも）君子は何も言わないものである。勝手に經典を作れば（真の）経文を乱すこととなり、おのずとその身に災いを招くこととなる。道が完備すれば、自然（の法）が完成する。

【注】

○自然之法

『老子』第二十五章「人法地、地法天、天法道、道法自然。」

○混沌

班固『白虎通』天地「混沌相連、視之不見、聽之不聞、然後剖判。」

『太平經鈔』丁部卷四「古者聖人之教帝王也、深思遠慮、閉其九戸、休其四肢、使其混沌、比若環無端、如胞中之子而無職事、乃能得其理。」

○出妙門

『老子』第一章「道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲、以觀其妙。常有欲、以觀其徼。此兩者、同出而異名、同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門。」

○無増無減

『列子』湯問「渤海之東不知幾億萬里、有大壑焉、實惟无底之谷、其下无底、名曰歸墟。八絃九野之水、天漢之流、莫不注之、而无増无減焉。」

○千八百息

『黃帝內經太素』營五十周「黃帝曰、余願聞五十營。岐伯答曰、天周二十八宿、宿三十六分。人氣行一周、一千八分。日行二十分。人經脈上下左右前後二十八脈、周身十六丈二尺、以應二十八宿。漏水下百刻以分晝夜。故人一呼、脈再動氣行三寸。一吸、脈亦再動、氣行三寸。呼吸定息、氣行六寸。……一万三千五百息、氣行五十營於身、水下百刻、日行二十八宿、漏水皆畢、脈終矣。」

孫思邈『備急千金要方』卷八十一「扁鵲云、黃帝說、晝夜漏下水百刻。凡一刻、人百三十五息。十刻一千三百五十息、百刻一萬三千五百息。人之居世、數息之間。」

○長仙

『太平經鈔』乙部卷二「故天地不語而長存、其治獨神、神靈不語而長仙、皆以內明而外闇、故為萬道之端。」

○天門

『太平經鈔』己部卷六「神人語真人言…古始學道之時、神遊守柔以自全、積德不止道致仙、乘雲駕龍行天門、隨天轉易若循環。」

○神道

『易』觀卦「觀天之神道、而四時不忒、聖人以神道設教、而天下服矣。」孔穎達疏「微妙無方、理不可知、目不可見、不知所以然而然、謂之神道。」

『太平經鈔』乙部卷二「神人曰、決之於明師、行之於身、身變形易、與神道同門、與真為鄰、與神人同戶。」

『太平經鈔』丙部卷三「若此、夫人生受命之時、與天地分身、抱元氣於自然、不飲不食、呼吸陰陽氣而活、不知飢渴、久久離神道遠、漸失根本。」

○鬼神 『太平經』は「鬼道」に作る。

『三國志』魏志・張魯傳「魯遂據漢中、以鬼道教民、自號師君。」

○高士

『太平經鈔』甲部卷一「至士高士、智慧明達、了然無疑、勤加精進、存習帝訓、憶識大神君之輔相、皆無敢忘。聖君明輔靈官、祐人自得不死、永為種民、升為仙真之官、遂登後聖之位矣。」

○下士

『老子』第四十一章「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。」

○忌言 『太平經』は「妄言」に作る。

何晏『論語集解義疏』卷一 梁・皇侃義疏「然朋疎而友親、朋至既樂友至、故忌言。」
『太上洞房內經註』序「存洞房、慎吾所忌言。」

○學不師訣

『太平經合校』卷七十戊部之二・學者得失訣第一百六「讀書見其意、而守師求見訣示解者、是也。讀書不師訣、反自言深獨知之者、非也、內失大道指意也。」

○君子不言

『老子』第二章「是以聖人處無為之事、行不言之教。」第五十六章「知者不言、言者不知。」

○君子不言、妄作則亂

『太平經合校』卷七十一戊部之三・真道九首得失文訣第一百七「故凡學者、迺須得明師、不得明師、失路矣。故師師相傳、迺堅於金石、不以師傳之、名為妄作、則致兇邪矣。真人慎之慎之。」